

祈りの文化

芸林民夫

前書き

大司祭が群衆の前で手を広げ、「おお神よ、あなたの偉大なるお力と永遠の栄光の前に平伏してお祈り致します、今襲い来る悪の軍勢を退けて、あなたの忠実なる僕をお守り下さい！」

シャーマンが病人の身体に煙を激しく吹き掛けながら、「悪しき霊よ、早くこの身体から立ち去れ！」

高校野球のピッチャーは満塁の場面でお守りをぎゅと握り、強打者を三振に打ち取ることを切に願う。

ゴングが鳴るとボクサーは十字を切り、相手のKOを願う。

はてな、こんな祈りは叶えられるかな。

祈りと国家

文明社会初期から、「祈り」は生活の中心をなしていた。宗教が重要な役割を担うようになってきたのは、農耕民族が中近東のシュメールのような都市文化を築き上げた頃である。そのような文化では僧侶が君主であり、宗教は政治であり、宗教の掟が国の法律であった。政治は神の思召によるもので、政治そのものが「祈り」の一種でもあった。

人間社会が超自然的なものによって支配されていた間地上社会とそこに指示や命令を下す「神」の社会との連絡は、国の代表者の「祈り」であった。エジプトのファラオは生きている間は僧侶であり、君主として国民の祈りを神に伝えたが死後は神に、祈りを受ける側になる。王が地上社会と超自然社会との密接な連絡を担っていたのである。

日本でも昔、政治と宗教は同一であり、「まつりごと（政、祭）」という言葉は政府の仕事だけでなく神を崇めたり神に祈りを捧げたりするという意味でもあった。狩猟民族のシャーマンも、その種族の「神」との連絡係である。シャーマンは種族の政治面よりその精神面の支えであり、同時に医者でもあって、祈りによって神の恩恵を種族に呼び寄せる。シュメールの君主、エジプトのファラオ、また日本の天皇も、その民族のシャーマン的な役割を果たしていたのである。

日本では、太平洋戦争の終わりまで、天皇の役割は国民行事の中にはっきりと位置づけられていた。正月、建国記念日、春の田植え、収穫感謝の新嘗祭等で、天皇は国民の祈りを神々に伝える役を果たしていた。ただ現在は、終戦の際に「天皇は神ではない」と宣言したため宗教と政治が分離され、役目は同じでもその行事は国の公的なものではなくなった。

政教分離が民主主義の思想だと唱えられているが、国全体の祈りとして祭日を制定している例もある。例えば日本の秋分の日は、1948年に「お彼岸にちなんで先祖の霊を慰めるため」のものだと決められた。アメリカの「Memorial Day（戦没者記念日）」に似ている。政教分離を最初に打ち出したアメリカでも、クリスマスは祭日であり、また主の誕生にあやかって神の力を請うことも多い。大統領就任式、裁判や紙幣などにもそれが表れている。

このように、「祈り」は文明成立初期から現在に至るまで、人間の生活に密接な関係を持ち続けてきたのである。今では政治を担う人は行政を超自然的な啓示に頼るわけではないし、「祈り」による政治は国民に通じないだろう。とはいうものの、特に西洋の国では、教会で祈る政治家の姿は大変なイメージアップである。日本でも政治家が祈ったり仏教や神道の儀式に参加したりすることは損ではない、むしろその敬虔さの証となる。毎年、靖国神社の戦没者慰霊参拝の時に政教分離の問題が取り上げられるが、政治家が私事として個人的に参拝するのであれば別に悪いことではない。また特別な記念日に「黙祷」を行う国も多く、日本では8月15日正午の1分間の黙祷はいつも高校野球の真最中で、選手も観戦者もそしてテレビを見ている人も、頭を下げて祈る。

祈りと個人

政府単位ではなく、個人での「祈り」を考えると、真剣に祈る人はやはり超自然世界を信じる人である。もっとも、はっきりした宗教をもっていない人も「いるかもしれない神」に祈る。どちらの祈りでも社会が変に思うことはない。

しかし、神仏に頼めば人間の希望どおりに事が運ぶと考えると、いろいろな疑問が生じる。1、人間社会を完全に牛耳っている神がいるとしても、神は地上のことをそんなに気にかけるだろうか。2、なぜ人間個人のために動くのか。3、こちらの頼みがあちらの損になるというような場合には、どちらをたてるのかをどういう基準で選ぶのだろうか。

「祈り」は世界中どこにでもある風習であるし、人間の中でも真面目と言われる人こそ祈りをする。西洋でも「祈る人」は真面目人間として見られる。祈ることを、「困ったときの神頼み」ではないが、「藁をもつかむ」こと、他に道がないときの最後の手段として視る人もいるけれども、ほとんどの場合、祈りは神仏に対する敬虔な心を表すものである。祈る人をそのようにみなすのは、人間の価値観と理想を決定する宗教活動が、文化に於いて最上のものであると考えられるからである。

一方、「祈り」ほど非科学的なものはない。科学が実験し資料を集めて結論を出すことなら、実験もできず資料も集められず結論しかない祈りは、学問にならない。だからといって、人間が文化をもたらしながら夥しい時間と精力と血とを費してきた「祈り」という風習をおざなりにする法はない。「祈り」について理論的に調べることも、文化学に於いて有益なことではないだろうか。そのような思いから、この研究をまとめてみた。

以下の概略に沿って考えてみた。

I. 祈りの定義

- A. 神と話す
- B. 賛美の祈り
- C. 感謝の祈り
- D. 願いの祈り
 - a. 目的
 - i. 天の守護
 - ii. 御利益
 - b. 祈りの形
 - c. 祈りの相手

II. 祈りの信仰

- A. 「神が存在しなかったら人間が発明しただろう」
- B. 神仏は人間の祈りを聴き入れなければならない
- C. 神は人間を必要とする

III. 祈りの結果

IV. まとめ

I. 祈りの定義

A. 神と話す

キリスト教の宗教家が「祈り」を説明すると、「神様と話すことである」と言う。¹⁾ いうまでもなく、相手は人間の言葉では答えないから、普通の対話にはならない。「神と話す」と表現する人は、神を人間と同様の機能を持っている存在と見なす。キリスト教ではイエスが神でありながら人間でもあると信じるから、「神と話す」ことは特別な会話として想像しやすい。

しかし、ギリシャ神話の中では神々があまりにも人間らしく人間と話すため、「神と話す」こ

とは、逆に普通の会話を意味する。『イリアス』でテティスがアキレウスと話すときは母と息子として対話する。²⁾『オデュッセイアー』でキルケーはオデュッセウスと愛人として話す。³⁾人間が神々に祈って願いをすることも度々あるが、ただ「神と話す」のは「祈り」とはだいぶ違うと考えるなければならない。

聖書の中でも、神と話す人間、例えばアダムとエヴァは、神に嘘をついたり言逃れをしたりするので⁴⁾「祈り」というイメージに当て嵌まらない。

このような例が多いことから、「祈り」イコール「神と話すこと」とは考えにくい。「神と話す」というのは祈りの促進のために教会が考える説であり、祈りが人間の言葉で出来るということは認めるが、ここでは定義として採用しない。

B. 賛美の祈り

教会は祈りを賛美、感謝、願いの3種類に分ける。神を賛美することが昔から宗教の大きな目的の1つであることは間違いない。人間の創造は人間に神を崇めさせるためだった、とする宗教もある。ギルガメシュ叙事詩⁵⁾、バビロニアの神話⁶⁾などがその例である。旧訳聖書のヨブ記にも、神は自分が人間よりもはるかに栄華のあるものだから、それゆえに神を崇めねばならない、とある。つまり、御利益がなくても、神は余りにも素晴らしいものだから、神が神であるがゆえに、人間は無条件に神を崇めるべきだ、となるのである。もっとも、ヨブはひどく虐げられながらも神を賛美したという理由で、サタンに奪われた財産などを倍返しにされ、沢山の子供をもうけて140歳まで幸せに暮らしたということである。⁷⁾

ヨブ記の神学的な問題は「なぜ敬虔な人に不幸が起きるか」である。神を崇めても恵みばかりがくるとは限らないのが世の常である。特に、旧訳聖書の時代の信仰の目的は死後に天国へ行くことではない。偉大なる神がユダヤ人の祖先のアブラハムに約束した報いは「星の数ほどの子孫が富める大国を築く」というものであった。⁸⁾後に、キリスト教の答えは、敬虔な人への報いが天国である、となるが、それは結局ヨブ記の最後の結論に戻ってしまう。人間が神を賛美すれば報いは必ず来るはずだ。神を崇める義務があるとしてもこれは神の機嫌をとるという意味であり、神をいつまでも見方につけようとする行為であろう。

現在のイスラム教の祈りには神の賛美が多い。クルアーン（コーラン）は「恵あまねく慈悲深き神・アッラーの御名により讃えまつらんアッラーをそは万有をしろしめし…」⁹⁾ではじまる。「恵あまねく」「慈悲深き」という言葉には人間に対するアッラーからの報いがうかがえる。第5節には「御身をこそは崇めなむ」「御身こそはすがらなむ」とある（アラビア語で、イーヤーカナウブドゥワ イーヤーカナ スタイン）。¹⁰⁾

病気などを治すために神に頼むことが主な仕事であるシャーマンの祈りの場合には、神を賛美したり機嫌をとったりすることはあまりない。また、仏教のお経は讃美歌とは考えにくい。

以上のことから、ここでは「祈り」の一般論として、賛美の祈りは直接的に目的を表現していない願いの祈りの一種である、と考えてよいだろう。

C. 感謝の祈り

願いの意味から少し離れるが、頂いた利益に対する感謝の意を神仏に表すことも「祈り」という。この場合の感謝は、次の御利益を考えてのことと思われる。確かに何か恩があってその感謝を表さないと、その人は「恩しらず」と言われてしまう。しかし、恩を表現するのは何か「恵み」を頂いた後であるから、完全に願いから切り離すことはできない。むしろ、願いと感謝はペアである。農民は春、神に良い収穫を願うから、秋にそれを頂いたときに感謝しなければ、翌年の願いは難しくなる。特に農耕民族の場合は一年の周期の意識が強く、必ず翌年のことを案じる。

狩猟民族の場合、神はよく動物、それも獲物になる動物の姿になる。なぜ動物神が人間に繰り

返し殺されることを許すのか？そういった民族の信ずるところでは、獲物を殺した際、殺した人間はその獲物に感謝の意を表し、その動物の霊を慰めなければ、再び獲物にはなってくれないのである。逆に、感謝の念を表せば、獲物になる動物神は「喜んで獲物になってやる」と言うとのことである。¹¹⁾

「感謝祭」というものは特に農耕民族に多く、それは一年の収穫の時期がだいたい決まっているからである。しかし、狩猟民族でも狩の成功の時にお祝いをする。アメリカの感謝祭は収穫祭として生まれたが、日本の勤労感謝の日も以前は新嘗祭で、天皇が国民を代表して先祖の天照大御神に収穫の感謝の意を伝える祭日であった。

D. 願いの祈り

何かの望みを持ち、それを叶えるためにある言動によって神仏に頼む。その言動は直接その望みを実現するためでなく、神仏の仲介による実現のための行動である。

願いの「祈り」には三つの要素があると思われる。1. 目的、すなわち叶えてほしい望み。2. 形、その望みや願いの伝え方。3. 祈る相手、その祈りを聴いて叶えてやる者、一般的に「神」。

a. 目的

i. 天の守護

祈りの対象となるのは人間が希望するもの総てであるが、大ざっぱに言えば、御利益である。だがここで「利益」をあまり営利的な意味に絞ると守護の意味が薄くなる。世の中の危機から守ってほしいということが祈りの大きな目的のひとつ。宗教の役割はもともと災害などから信者を守ることである。キリスト教には「守護聖人」「守護天使」というものがあって、信者や特定の教会、町、国等を守る役目を担う。日本の「お守り」は様々な不幸から人を守るためのものとしてその名がついたが、次第に「守」という消極的な役から多少積極的になって、「一流大学に合格するため」や「商売繁盛」のためにも使われるようになってきた。

危機に曝された時にこそ、人間は祈る。第二次世界大戦の時、あるアメリカの宗教家は「塹壕に無神論者はいない」¹²⁾と発言した。危険な時は皆信心深くなる、真実に目覚めるという意味での発言であろうが、別の見方をするなら、それこそ「藁をもつかむ」行為である。自分では防ぎきれない不幸が無作為的に起きるという状況下では、その「無作為」を左右できると思える力の持主に頼ることこそ人情であろう。

ii. 御利益

宝くじにしても受験に合格するためでも「御利益」であることに変わりはないが、仏教、新興宗教などと違って、キリスト教では「御利益」は、一応好ましくない表現である。キリスト教信者はこの世のもので報いを求めてはいけなく、この世の富が多いからといってそれで神に愛されていると考えてはいけなく。とはいえ、キリスト教関係の祈祷書を見れば、安産から雨乞いまであらゆる祈りが揃っている。

国は戦争の勝利を祈るが、敵も同様に祈るであろう。その場合、どちらの国民も、相手が「悪」であり、自分たちが頼んでいる神は「悪」に勝てる、と信じている。イラン・イラク戦争の時には両国は「アラーは味方だ」と大きく宣伝し、そのため戦死者は皆「殉教者」になったが、アラーとしては、両国の祈りをどう受け容れたらいいものかと困ったことだろう。

イスラエルとアラブの紛争、北アイルランドのプロテスタントとカトリックの摩擦、元ユーゴスラビアの各民族間の戦乱などは、宗教が中心的な役割を担っており、戦争の勝利への祈りは日常生活の一部となっている。聖書をはじめ昔の神話では、勝ち戦は神が味方であったためだが、もちろん、「勝てば官軍」で、全能の神が負けた戦に味方していたはずがない。なぜか、イラン・

イラク戦争や湾岸戦争は、祈りを叶えるはずのアラーの減点対象にはならなかった。太平洋戦争の時、日本国民は昔の「神風」神話を信仰の支えにして神社などで必死に祈りを捧げた。当然、アメリカ人、イギリス人なども皆、自分たちの神に懸命に祈っていた。

個人的な祈りの場合、その種類は数限りなくあり、あくまで個人的な御利益が目的であるのが普通である。国や大きな団体の祈りの時と同じく、片方の祈りが叶えられた場合もう一方には損が出るものだが、個人の祈りの場合にはその矛盾はもっとはっきりしてくる。同じ国民、同じ宗教の人同士が祈るときはなお一層のことである。

例えば、宝くじに当たるように祈る場合、神が特定の人間に当たるようにさせたら、当たらなかった人には損である。ボクシングの試合でよく二人の選手がラウンドがはじまる前に十字を切るが、どうして自分が勝つべきなのか、どうして神が自分を特別視してくれるはずだと思うのか、その理由はなかなかわからない。十字をきらないと、相手が不当な手段で勝つ可能性から守ってもらえないと思うのか、神に「この人は不熱心だ」と見なされてしまうことを心配するのか、いずれにせよ、神は祈る人にえこひいきすると思っていることになる。

「祈れば与える」¹³⁾と聖書の中にもあるが、なぜ祈る者に与えるのかという理由には、神が祈るものを愛するのだということくらいしかない。新約聖書のマタイ記7章9節に、息子にパンをせがまれた父親になぞらえて、父親が息子に欲しがるものを与えてやるように、人間が祈れば父なる主は人間が祈るものを与えてやるのだという主旨の記述がある。

つまり、ヨブ記で問題となったように、神の栄華を認め神を崇める者は求めるものを与えられるということになる。バビロニアやギルガメシュの神話と同じように、人間は神を賞賛したり神の世話をする義務のために存在することになる。

また、同じ目的を持って祈りをする者が複数の場合、神はどちらを選ぶのか、どういう基準によって「勝者」を選択するのか、その特別扱いは何によるものなのか。例えば、自分が他人よりも神の寵愛を受けていると思う人は、特別な神からの啓示があったのか、それとも他人よりも神を大事にしているのか、どちらにしても、他人よりも自分の祈りを叶えてもらう権利があるのだと信じているはずである。

同じ神を信じているボクサー2人ともが相手に勝つことを神に願っても、神は困る。人を倒し気絶させることが神の恵だと考えることも問題だろうが、スポーツなどの試合の時に、絶対公平であるはずの神が片方を負かすというのは矛盾である。

異なる神に祈る時でも、悪と善の問題というより、妙に神同士の対決になる。毎年甲子園で対戦する野球チームが、(インタビューで「祈りが通じたんだ、うちの神が勝たせてくれたんだ」と答えるように)野球の腕前の競い合いというより、双方からの祈りによる互いの神の試合になってしまう光景も見られる。

b. 祈りの形

「祈り」そのものは心の願いであり、心に思うだけでも神や仏には分かることになっているが、その願いを神仏に届けることこそ「祈り」と言う。

人間は色々な形で祈りをするが、昔はただ言葉だけで神に願っても十分な効果はないと思われた。文明初期には、神から頂くものは「生命」そのものであると考えられ、豊饒の神、女神は、生命を与えて下さるからこそ崇めていた。豊饒多産は常に人間の願いであった。同時に、神、女神が大事にするものも「生命」であって、願いを聴き入れていただくためには生命を供えて祈ることが一番である。そして、人間の目から見れば一番良い生命体といえば、人間の命そのものである。昔の人が人間を生贄としたのは、神や女神がいちばん気に入る生命を捧げるためであった。その大事なものを貰う代わりに、神は獲物や翌年の収穫を与えるのである。アズテック(アステカ)族は神が太陽の光を絶やさないようにと2万人もの生贄を捧げたことが記録に残ってい

る。¹⁴⁾しかし、古代ギリシアとユダヤでは動物、エジプトでは植物、現在は人間の産物などが、人間の命に変わって神に捧げるものになり、「生贄」ではなく「供え物」になった。

現在、「祈り」を形で分類すると、定形の祈り、必要に応じた臨機応変な祈り、黙祷の3種類になる。欧米にもこの3種があるが、グループで祈る時にはほとんど教会や各々の宗教が決めた言葉を使う。イスラム教はクルアーンからの言葉を使うことがほとんどである。キリスト教では聖書も引用するが、用途によっては作られた祈りも多い。食前・食後の祈りやミサ時の祈り等がそうである。アメリカでは、多様な宗教の人々が集まった時の祈り、例えば国全体の安全のためや殉死した兵士などへの祈りは、黙祷が普通である。それは宗教の違いを尊重するためであるが、多様な宗教を持つ人々が同時に祈ることに対する疑問はなく、当然のこととされている。

日本では祈りというと「お経」を連想するが、法事や葬式の場以外は、ほとんど黙祷である。欧米では大きなグループでの祈りの際に黙祷をするが、日本では個人の祈りもほとんど黙祷である。動作も決まっていて、手を合わせ、または叩き、頭を下げ、無言で祈る。この動作は神社でも葬儀の場でも仏前でも見かける。(手を叩くのは神道からきた、自然宗教の中のごく当たり前の行為で、神の注意を引くために行う。)手を合わせる動作は国際的なもので、キリスト教、仏教共通である。

ムスリム(イスラム教徒)の礼拝には途中で何回もアラーに平伏す動作があるが、これは昔、王などに自分との身分の差を示すために行った動作でもある。中世ヨーロッパの王室などの跪拝、王の手や指輪への接吻が旧教に残っていて、ローマ教皇や聖公会の司祭に対する儀礼にそのまま見られる。日本でも、古墳時代から同じ意味で豪族などに土下座していたが、祈りの動作としてはあまり一般化していない。それは、仏教の仏や神道の神々は「主」と「殿様」の役ではないからであろう。

文化によって決まった祈り方がある。そして、その決まった祈りの言葉や動作をすれば「お祈りした」ことになり、言葉や動作の意味を意識したり理解したりしなくても「祈り」と認められる。1960年代までローマ・カトリック教会は一般の信者が理解できないラテン語をミサの言葉にしていた。日本でもお経を理解する人はほとんどいないし、自分の代わりに僧侶に唱えてもらって、法事、通夜、葬式で延々と調子を合わせて「祈」る。こういう儀式的な祈りでも効果があるという信仰が続くため、祈りの魔法的な効力を感じ、ある決まった祈りの言葉や動作さえすれば自動的に効果が出ると思うようになる。「心をこめて祈る」ことが一生懸命神仏に伝えようとすることから、ひとつの動作や行動を熱心に行う意味に変わってくる。ラマ教の回転礼拝器はその典型的な例である。ヨーロッパの教会でよく見るローソク台も同じようなもので、10フランのローソクをマリア像の前で灯せば、燃えている限り祈りがマリア様の耳に届くことになっている。

要するに、公式的な祈りは、人の意識から離れて、決まっている儀式的な行為によって効果をもたらすものである。

c. 祈りの相手

祈る人間は、人間の世界に存在するものより優れた、自分より力のあるものに頼むことになる。各人の宇宙論(コスモロジー)によって祈る相手は違ってくるが、その相手は、1. 人間より力があり人間社会に影響を及ぼすことができる。2. 人間の願いを受け容れる意思がある。

無論、1にはユダヤ教の唯一神が入るが、キリスト教やイスラム教では、唯一神のほかに「聖人」というものがある。聖人は、生前に際立った功績を上げ、神と特別な仲になる。教会の説明では、その聖人自身の力というより、神との仲により、神がその聖人の頼みを聴き入れてくれるので、効果があるのだ。最たる例がマリア崇拜である。マリアに祈れば、神キリストが自分の母であるマリアからの頼みを断れるはずがないので、一番確実な祈りだ、というわけである(但し、マリア崇拜には昔の地母神崇拜が残っていると主張する学者が多い。神イエスが一度死に、そし

て蘇えるのはエジプトのイシス女神とオシリスとの物語にそっくりである)。旧教(カトリックとビザンティン系の教会)には、祈りの用途別のスペシャリスト聖人がいっぱいいて、頼みによって相手が違う。聖アントニオは遺失物を見つけてくれる、聖クリストファーは道中の安全を守ってくれる、など。¹⁵⁾これは、自然宗教の各自然現象に対応した神と同じ役割を果たす存在が求められた結果である。神が一人しかいないと色々な機能に分けるのは難しいが、火の神、木の神、風の神、熊の神などとたくさんいると、祈りの用途に応じて選びやすい。

仏教に「神」というものはないが、様々な菩薩や観音があり、祈りの対象はバラエティに富む。仏教徒は仏に祈りを捧げるが、神道やキリスト教のような日常生活に関する細かな頼みごとは見られない。日本の仏教の祈りは死後の世界に関するものが多いが、これは死者の「冥福」のためであり、死者に対する生存者の社会的な義務である。ただ、菩薩や観音やお稲荷様などは特に人間に対し慈悲をもって苦しみを和らげてくれると思われ、祈りを受けることもある。仏教の世界では縁起物が多く、決まった方角やら時間やらを守れば、望みが叶えられるとされている。仏教のお守りを絶対に身体から離さないスポーツ選手も少なくないが、日本人は日常生活のための「祈り」はたいてい神社の方へ行く。

神社ではあらゆる願いに見合うお守りが用意してある。単純に、その魔除けや祈願成就のお守りの豪華さによって値段が違ってくるのだが、例えば、日本では交通安全のお守りは、欧米の聖クリストファーのメダルと同じくらい人気がある。

II. 祈りの信仰

A. 「神が存在しなかったら人間が発明しただろう」

これはあるアメリカ人神学者の言葉である。人間は自分の理想と現実を見比べると、どうしても、自分をとりまく環境をもっと思いどおりにできる力が欲しくなるものだ。原因がわからない現象は人間以外の何かの力によって動かされているのだと信じたくなる。例えば、農耕民族は周期的な季節の中で、予期せぬ天候の変化は何かの意図によるものだと信じ、必死にその「何か」の機嫌を取ろうとする。

ギリシアのゼウスをはじめ、日本の天照大御神、バビロニアのマルドック、カナンのパアルなどは空の神で、雷を轟かせ稲妻を武器にして嵐と日照りを起こすと思われたものだが、そう信じられた背景には、偶然という、意思も意図も命も持たないものに翻弄されるより、強大な力を持つ支配者に頼りたいと思う気持があった。

その意味で人間が必要とした神の形を探し求める。動物の中で自分の死を予想できるのは人間だけであり、その死を避け、あるいは死の恐怖を和らげるために死後の世界を想定するようになった。少なくとも3万年前のクロマニヨン人の時代には、死んだ人を儀式的な形で埋葬しており、死後の世界が信じられていたことがうかがえる。エジプト人は死後の世界はこの世と同じようなものだと考えていたし、ギリシア神話中の人物は冥界を暗く悲しい世界だと信じた。が、ユダヤ人はかなり長い間その存在さえ考えなかった。

後にエジプト人をはじめユダヤ人、キリスト教徒などは、死後の世界の善し悪しは生前の行いによって決まると信じるようになった。つまり、人間は自分の死後にも生きられるだけではなく、死後のあり方に影響を及ぼすこともできるのである。

人間が祈りを必要とするのは、世の中の辛さや災いを乗り越える自分の力と知識の不足を補うためである。その祈りを送る相手は無言、無意識、無作為、科学的な存在ではなく、世の中の辛さ、災い、あらゆる現象にまさり、またそれを何かの目的をもって左右している存在である。これが「霊」または「悪霊」、「神」、「仏」などと呼ばれるものであるが、これらは文化によって性格がかなり違う。ユダヤ教やイスラム教の神は全能であって、天地万物を創造したのだから、それら総てにまさる。古代ギリシアの神々は人間と同じように振舞い、喧嘩したり恋愛したりした

が、やはり不死であり自然に悩まされることもないものだった。言い直せば神や仏の性質にはそのような要素が必要であり、力がなければ祈り先としての価値が無いのである。

B. 神仏は人間の祈りを聞き入れなければならない

しかし、その力を持つ神仏は、人間の願いを受諾する性質も備えていなければならない。いくら全能の神であっても、いくら人間より秀でていても、人間にとっては、何らかの方法で願いを聴き入れてもらうことができなければ意味がない。少なくとも、祈る者は神に願う時、神の機嫌を取る方法、神の好意を得る方法を知っておかなければならない。

神がどんな行為によって機嫌を良くし人間に好意を持つのかは、歴史を繙くと不思議な例がたくさんある。アズテック族は、人間の生贄がなければ朝太陽が昇らなくなると信じて、夥しい数の人間の命を神に捧げた。『イリアス』に読める「hecatomb」（雄牛100頭の生贄）は神への敬虔の礼拝であった。¹⁶⁾ 旧訳聖書の有名な話では、敬虔さを試すための神の命令によりアブラハムは一人息子のイサクを生贄に差し出し、危うく殺すところであった。祈りが長ければ長いほど喜ぶという神もいるし、祈る人が苦しむほど良しとする神もいる。

いずれにしても、人間が神に対し影響力があるということが、祈りの前提になる。しかし、神が人間の願いを聞き入れる理由は様々である。キリストならば人間を愛するから、というのが通常の考えであるが、神学的には、神に祈ることはその神の地位を認める行為であり、神を讃えることを意味する。そして「讃える」ことによって世の中は正しい状態になる。ヨブは身に覚えのない苦難を受け続けたが神を疑いはしなかった。「山があるから登る」ように、神はいるから拝むのだ、というのが結論である。要するに、神には、人間の神に対する崇拜が必要なのである。

アイヌ民族の儀式に大きな役割を担う「イナウ」は、人間の祈りを神に伝える媒体であるが、神はこの聖なる「使者」を無視できない、と信じられている。この考えは一種の呪物崇拜であるが、なぜ無視できないのかという説明まではない。日本でよく魔除けとして使われる注連縄しめなわは、天照大御神を岩窟に戻さないために入口に張られたが、¹⁷⁾ 理由は定かならずとも注連縄には神も霊も通さない不思議な力がある。

追善供養についても触れておこう。死んだ後では、その人が生きていた間の神仏に対する態度を変えることも祈りを捧げることも、当然不可能である。そのため、その死んでしまってもう祈れない当人の代わりに、生きている者（子、親戚など）が「祈り」を補うことになる。仏教では「冥福を祈る」と言うし、旧教にも死者のための祈りがある。菩薩は人間が涅槃を得るまでは死者の手助けもするし、旧教では、死んだ人が全くの「悪」でなかったら、煉獄という暫定的なところでいて、祈ってもらうことにより救われるとされている。（プロテスタントでは、死んだ時に死後のことが全部決まるため、本来死者のための祈りはない。ただそれに似た記念的な儀式は宗派によっては行われる。）

C. 神は人間を必要とする

ユダヤ教の聖書の中では、神が人間を創造した動機は、神の庭の世話をさせるためであった。¹⁸⁾ バビロニアの神々は誰か世話をしてくれる者がなければ自分たちで働かねばならないので、マルドック神が人間をつくった。¹⁹⁾ シュメールのギルガメシュ伝説では、エンリルという神が人間がうるさいので洪水で皆殺しにしようとした時、他の神々は「誰が我々の世話をするのか」と心配し、ピル・ナピシュテム（聖書でいうノアのような人物）を救った。²⁰⁾ ギリシアの神々は人間の捧げる生贄などによって栄光を増やしていたらしい。ギリシアの英雄たちが名誉の印たる戦利品を非常に好んだように、神々も生贄の品々を喜び、多く捧げてくれる人間をひいきにした。ちなみにギリシアの神々は他の神よりずっとつきあいが親密で人間と変わらないところが多く、性行為も喧嘩もし、人間との間に子供がいることもあって、もちろんその子を特別扱いしていた。

Ⅲ. 祈りの結果

祈るのは目的があつてのことだが、当然、その目的は叶えられないこともある。もちろん統計を取る方法もないし、祈りの結果は第三者の目には無作為的に見え、その効果は確認できない。実現の可能性が薄い望みの場合は祈りの効用も少ないようだが、これも証明する方法はない。祈りが通じなかった時の言い訳には2つある。1つは、祈った人が祈り方を間違えた、熱心さが足りなかったなど、祈る側の問題である。もう1つは祈りを受ける神仏の側で、祈る人への試練やあるいは嗜みなどで叶えてやらなかった場合である。前者では、通じなかった祈りをした人は自分のやり方や熱心度などへの疑問がわく。後者は祈りに自動的効果は無いと主張するキリスト教などの言い訳であるが、中には「神は必ず祈りを聞くが、場合によっては答えはノー」という冗談めいた説明もある。

祈りの結果、その叶えられる比率が統計的にわかれば、祈りが効果的な行動かどうかはわかり、祈るかやめるかの判断ができる。しかしそんなものはない。それは、祈らなくても実現できたこと、祈りはしたが偶然に実現したこと、祈ったけれど実現しなかったことも含めて、何があつてもそれが祈りの結果だと信じることもできるのだ、ということでもある。

結局のところ、祈りをするかしないかについて科学的に評価する人はいない。祈りはあくまでも宗教的なものであつて、神仏の存在を信ずるゆえの行為である。むしろ、宗教は祈りをするためにあるもので、神に頼みごとをできないなら神の存在意義もない。キリスト教、ユダヤ教、イスラム教、仏教等、世界の宗教はどれも祈りを中心に展開する。カトリック教会では毎週日曜のミサに参加しないと罪になるし、イスラム教では毎日5回の祈りの定めが有名である。

Ⅳ. まとめ

1. 「祈り」には賛美、感謝、願いと3種類あるが、このうち賛美と感謝は御利益が期待されない場合にはありえないものだと考えてもよい。賛美は神を誉め讃えることであるが、そうすることによって神から好意的に見られるよう期待してのことだからである。感謝という気持ちは安心も表現しているが、御利益を頂いてから更に次なる御利益への期待を抱いてのことであろう。

祈りで願うものは、御利益と保護の2つである。しかし保護は広い意味での御利益のひとつであり、「お守り」という名でも何かの御利益のための魔除けである。要するに、「祈り」とは人間が神仏にご利益を求めることだと定義できる。

2. 昔、創造物に限りがある、つまり万物が無尽蔵ではないという概念がなかった頃は、祈りによって得た利益は神が生み出した恵みだと思ったことだろう。が、そんな時代でも、ある種の御利益は他人の損になる。競技や戦争の勝利はすなわち相手の敗北である。二者が同じ御利益を求める際どちらに与えるのかという基準は人間には不明である。両者とも御利益が欲しいのは当然だが、勝った時には感謝し、負けた時は無言。

3. 人間は長い間、神に願う時に言葉だけでなく、生贄、供物、呪物、回転礼拝器等の手段で祈りを捧げてきたが、「心を込めた」祈りは少なく、儀式的な型にはまったものが普通であり、カトリック教会の祈祷文や仏教のお経のように、理解できない言葉での祈りを強制的に要求するところが多い。

4. 祈りを受けるのは、人間を悩ませる事柄を左右する力を持つ存在であるが、全能神のほか、菩薩、聖人、聖母マリア、あるいは種々の動物にも祈りは向けられている。全能神よりも親しく感じられる聖母マリアや聖人に祈ることが多い。

5. 人間は神がいなければ、自分の力の足りなさに耐えられないのだろう。特に人間は死に直面するのが恐ろしくて、神仏の世界を必要とする。

6. 神が祈りを聴いてくれるということは、神がいるということである。したがって神が存在

していても、人間の祈りを聴き入れないものだったら、人間にとって無意味な、あるいは呪うべき存在となるだろう。

7. 神が人間の祈りを聴くのは単なる気紛れではなく何か人間を必要とするところがあるのなら、神にとっても人間は不可欠な存在だと考えることができる。キリスト教では神は人間よりはるかにまさるといい、人間が神を崇めなければ永遠の苦しみに処せられる。中近東の神話やユダヤ教の聖書の中にも、神は用をさせるために人間をつくったとある。

8. 祈りの結果は必ずしも望みどおりにはならないが、その場合、祈った人が悪かったのか神が断ったのかのどちらなのかは、判断できない。判断できないゆえ、結果がどうであれ、祈りを信じる人は祈りをやめることはない。

脚注：

1. カトリック入門, 中央出版社, 1971, p. 47
2. The Illiad: trans. Martin Hammond; Penguin Books, 1987, p. 58
3. The Odyssey: trans. E. V. Rieu; Penguin Books, London, 1946 ; p. 125
4. The Holy Bible, containing the Old and New Testaments; Revised Standard Version: Translated from the original tongues the version set forth A. D. 1611 revised A. D. 1901 compared with the most ancient authorities and revised A. D. 1952 : Thomas Nelson and Sons LTD. London; 1957, p. 3
5. Mercatante, Anthony; The Encyclopedia of World Mythology and Legend, Facts on File, New York, 1988, p. 276
6. Mercatante: p. 13, 他
7. Revised Standard Version; p. 418
8. Revised Standard Version; Genesis, 15, 1
9. 聖クルアーン ; アリ安部治夫訳, 谷沢書房, 1982; p. 15
10. 安部治夫, p. 15
11. Campbell, Joseph; Primitive Mythology, The Masks of God: Penguin Books; Middlesex, England; 1959; p. 282ff.
12. W. T. カミングズ従軍司祭がバタアン半島の戦いの時に説教に使った文句。Brewer's Dictionary of Phrase & Fable; Cassell, London, 1986; p. 59. 8
13. Revised Standard Version; Matthew, 6, 5, etc.
14. Encyclopedia Britannica, vols. 1, 27, Aztec Civilization: 15th edition: 1990
15. Atwater, Donald: Dictionary of Saints: Penguin Books; England; 1965: p. 85
16. 「ヘカトンプ」はイリアスとオデュッセウスによく出てくるが、実際に神に捧げた数というより、神に対する敬虔さを示す数字として見られ、文字どおり100頭の牛を捧げることはなかったろう。
17. 古事記
18. 「創世記」2章15節
19. Cambell, Joseph: Occidental Mythology, The Masks of God: Penguin Books; Middlesex, England 1964: p. 75
20. Mercatante: p. 277